

2. 15 (有)朝日館／(株)向日葵設計

2. 15. 1 建築物の仕様一覧

事業名	伊勢 外宮参道コンビニエンスストア新築工事の設計及び建築実証			
実施者 (担当者)	有限会社朝日館／株式会社向日葵設計 (新田 知生)			
建築物の概要	用途	日用品の販売を主たる目的とする店舗		
	建設地	三重県伊勢市		
	構造・工法	CLTパネル工法、木造軸組工法+CLT壁 (耐力壁)		
	階数	1		
	高さ (m)	5.985		
	軒高 (m)	4.393		
	敷地面積 (㎡)	725.46		
	建築面積 (㎡)	253.27		
	延べ面積 (㎡)	230.08		
	階別面積 (㎡)	1階	230.08	
	2階	—		
	3階	—		
CLTの仕様	CLT採用部位		壁、屋根	
	CLT使用量 (㎥)		加工前製品量65.29㎥、建築物使用量57.85㎥	
	壁パネル	寸法	150mm厚	
		ラミナ構成	5層5プライ	
		強度区分	S60-5-5	
		樹種	スギ	
	床パネル	寸法	無	
		ラミナ構成	無	
		強度区分	無	
		樹種	無	
屋根パネル	寸法	90mm厚		
	ラミナ構成	3層3プライ		
	強度区分	Mx60-3-3		
	樹種	杉		
木材	主な使用部位 (CLT以外の構造材)		梁：欧州赤松集成材、小屋束：欧州赤松集成材、軒天下地：杉、破風鼻隠し下地：杉、屋根下地通気胴縁：杉、屋根野地板：構造用合板2級	
	木材使用量 (㎥) ※構造材、羽柄材、下地材、仕上材等とし、CLT以外とする		8.36㎥	
仕上	主な外部仕上	屋根	ガルバリウム鋼板 立平葺き (通気工法)	
		外壁	CLT t=150 最外装5mm 焼杉加工 (一部CLT t=36増貼りのうえ 焼杉加工)	
	主な内部仕上	開口部	アルミサッシ	
		界壁	不燃アルミ複合板	
		間仕切り壁	不燃アルミ複合板	
床	セラミックタイル t=9mm			
天井	高圧岩綿複層板			
構造	構造計算ルート		建築基準法施行令第81条第3項に掲げる構造計算	
	接合方法		ビス接合+引きボルト金物等	
	最大スパン		14.4m (東西)、9.25m (南北)	
	問題点・課題とその解決策		延焼の恐れのあるラインに係る外壁は防火構造とする必要があるが、CLTにおいては準耐火 (45分耐火) となり燃え代設計の厚みが45mm必要であった。(告示平12建告第1358号第1第3号ホ 令和元年告示195号第1第1号ホ) 90mmを構造体+燃え代設計45mm+炭化層5mmの合計140mmを十分に構成できる150mmのCLTを選定した	
耐火	防火上の地域区分		準防火地域	
	耐火建築物等の要件		無	
	本建築物の耐火仕様		45分準耐火	
	問題点・課題とその解決策		CLTの燃え代設計とするため準耐火建築物としている	
温熱	建築物省エネ法の該当有無		届け出対象	
	温熱環境確保に関する課題と解決策		深い軒を設けることで、夏季の日射遮蔽の低減を図る計画とした	
	主な断熱仕様 (断熱材の種類・厚さ)	屋根 (又は天井)	高性能グラスウール16kg t=100	
		外壁	高性能グラスウール16kg t=50	
床	硬質ウレタンフォーム t=25			
施工	遮音性確保に関する課題と解決策		十分な遮音性を確保している	
	建て方における課題と解決策		焼杉をしてからの建て方となるため、段取りとスケジュール管理を明確に行った	
	給排水・電気配線設置上の工夫		配管の長さがなるべく短くなるように計画をした	
	劣化対策		焼杉の耐久性は高いが、状況に応じて塗装によるメンテナンスを行う	
工程	設計期間		2025年4月～11月 (7カ月)	
	施工期間		2025年12月～2026年4月 (4.5カ月)	
	CLT躯体施工期間		2026年2月上旬～下旬 (計20日程度：建て方10日、焼焦がし10日程度)	
	竣工 (予定) 年月日		2026年4月23日	
体制	発注者		有限会社朝日館	
	設計者 (複数の場合はそれぞれ役割を記載)		株式会社向日葵設計	
	構造設計者		株式会社木構造デザイン	
	施工者		なかむら建設株式会社	
	CLT供給者		銘建工業株式会社	
	ラミナ供給者		銘建工業株式会社	

2. 15. 2

実証事業名：伊勢 外宮参道コンビニエンスストア新築工事の設計及び建築実証

建築主等／協議会運営者：有限会社朝日館／株式会社向日葵設計

1. 実証した建築物の概要

用途	日用品の販売を主たる目的とする店舗		
建設地	三重県伊勢市		
構造・工法	CLT パネル工法		
階数	1		
高さ (m)	5.985	軒高 (m)	4.393
敷地面積 (㎡)	725.46	建築面積 (㎡)	253.27
階別面積 (㎡)	1階	230.08	延べ面積 (㎡)
	2階	—	
	3階	—	
CLT 採用部位	外壁、袖壁、屋根		
CLT 使用量 (m ³)	加工前製品量 65.29 m ³ 、加工後建築物使用量 57.85 m ³		
CLT を除く木材使用量 (m ³)	8.36 m ³		
CLT の仕様	(部位)	(寸法 / ラミナ構成 / 強度区分 / 樹種)	
	壁	150mm 厚/5 層 5 プライ/S60-5-5/スギ	
	床	—	
	屋根	90mm 厚/ 3 層 3 プライ/Mx60-3-3/スギ	
設計期間	2025 年 4 月～11 月 (7 カ月)		
施工期間	2025 年 12 月～2026 年 4 月 (4.5 カ月)		
CLT 躯体施工期間	2026 年 2 月上旬～下旬 (計 20 日程度：建て方 10 日、焼焦がし 10 日程度)		
竣工 (予定) 年月日	2026 年 4 月 23 日		

2. 実証事業の目的と設定した課題

<目的>

CLT に厚い炭化層を持たせ(焼杉)、構造材と外装仕上げ材を兼ねた屋外 CLT 現わしの設計・建築実証を行う。過去の知見を発展させると同時に新しい建材 CLT と伝統技法を融合させることにより日本発祥の CLT 現わし手法として確立させる。耐候性・耐久性、意匠性、施工性等の優位性を性能実証すると共に、歴史的・文化的景観保全が求められる伊勢神宮外宮参道に初出店となるコンビニエンスストアへ適用することで、無柱木造空間や高い意匠性といった CLT の特徴を広くアピールし商業施設等への普及効果を狙う。一般的に耐久性 50 年以上ともいわれる焼杉板は表面に 5mm 程度の炭化層を必要とするが、CLT では炭化層 1～

2mm に関する実証例はあるが、5mm 程度の厚い炭化層を持たせた過去知見は確認できない。そこで今回、耐候性や施工性にフォーカスし、適切な炭化層の厚み確保、外壁地際部及び接合部小口の吸水・腐朽リスク等に対する技術検討を行うことで、CLT を外壁現わしで使用する際の選択肢となる技法を確立する。

<課題>

[課題1] 強度と優れた耐候性を両立させる CLT 現わし技法の確立（炭化層構築手法の明確化）

[課題2] 地際部、及び接合部小口の吸水・腐朽リスクへの対策

[課題3] 防火・断熱・通気との整合（構造と仕上げの一体化による課題）

[課題4] 景観との調和、意匠性の向上（歴史的環境への適合）

[課題5] 情報の整理と普及に向けた対応

3. 協議会構成員

（設計）株式会社向日葵設計：新田知生（協議会運営者）、杉浦愛子

山本武司建築設計事務所：山本武司

（材料・構造）銘建工業株式会社：鳥羽展彰、株式会社木構造デザイン：松岡忠生

（塗料）玄々化学工業株式会社：大木博成

（施工）なかむら建設株式会社：中村伸二、北村和士

（試験）建材試験センター：菊地裕介

（アドバイザー）京都大学小見山研究室：小見山陽介

（協力）伊勢神宮外宮参道発展会：会長 山本武士

（建築主）有限会社朝日館：中尾博之、中尾豪

4. 課題解決の方法と実施工程

[課題1] 火力や焼焦がし時間等の条件や端部の処理方法の検証、及び現場作業計画（製作場所、タイミング、等）は朝日館及びなかむら建設が中心となり実施。また、保護塗料の選定、促進耐候性試験を玄々化学及び向日葵設計が中心となり実施。

[課題2] 地際部、及び接合部小口の吸水・腐朽リスクへの対策については、協議会の中で検討。

[課題3] 構造と仕上げの一体化による課題の抽出、及び対応策の検討を向日葵設計、銘建工業、木構造デザインにて実施。

[課題4] 参道発展会とも調整し、焼杉の風合いや木目を活かすデザインを検討。

[課題5] 長期比較評価及び自由に見学できる環境の整備、使用材料・施工手順の整理等を実施。

<協議会の開催>

令和7年9月：第1回開催、協議会開催に向けた事前打合せ実施

10月：第2回開催、焼杉 CLT の施工方法、施工計画の立案

10月：第3回開催、焼杉 CLT 促進耐候性試験に向けた試験条件等の協議
11月：第4回開催、焼杉保護塗料選定検討会実施
11月：第5回開催、促進耐候性試験 試験条件検討
12月：第6回開催、CLT 施工方法検討（現わし外壁下端部納まり再検討、他）
令和8年1月：第7回開催、CLT 施工方法検討（接合部止水対策再検討、他）
2月：第8回、実証事業の取りまとめ

<設計>

令和7年8月～11月：実施設計、構造設計、建築確認申請

<施工>

令和7年11月：工事契約

12月～1月：着工、基礎工事

令和8年2月～3月：木工事、外構工事

<性能確認>

令和7年10月：焼杉 CLT 施工テスト

11月～1月：焼杉 CLT 促進耐候性試験

5. 得られた実証データ等の詳細

設定した課題において次の結果が得られた。

[課題1] 強度と優れた耐候性を両立させる CLT 現わし技法の確立（炭化層構築手法の明確化）

- ・ CLT 表面への5mm程度の炭化層の構築方法、及び現場での焼杉施工手順
- ・ 促進耐候性試験による焼杉 CLT 保護塗料（4種類）の評価、及び、耐候性・耐久性確保に適した塗料特性

[課題2] 地際部、及び接合部小口の吸水・腐朽リスクへの対策

- ・ 課題・対応方法を洗出しと、各部へ効果的且つ施工可能な施策

[課題3] 防火・断熱・通気との整合（構造と仕上げの一体化による課題）

- ・ 準耐火防火性能と断熱材同等の断熱性能、及び通気を確保した設計

6. 本実証により得られた成果

主な成果は以下の通り。

① 屋外現わし焼杉 CLT の確立（耐候性・耐久性に関する技術的知見の蓄積）

② 構造・仕上げ一体化による現場施工作業の合理化、工期短縮等

③ 地域景観と調和した意匠的付加価値の高い CLT 実例の創出

1枚の CLT で外壁全機能と高い意匠性を両立させることができた。伊勢外宮参道×コンビニエンスストアという多くの人々の目に触れる実例により、商業施設等への普及効果が期待できる。

2. 15. 3 成果物

1) 意匠及び設計概要

本事業は、伊勢神宮外宮参道(図1)-1)という歴史的・文化的景観に配慮した意匠性とコンビニエンスストアが求める高い機能性の両立に対してCLTを構造材および外壁材として用いた設計・施工である。

伊勢神宮外宮参道の伝統的な町並みに調和しつつ、参道の景観形成に寄与する象徴性を備えた木造店舗の設計とするため、外観には大きな切妻屋根を設け(図1)-2)木質感を前面に打ち出した構成とすることで周辺環境との一体感を図っている。軒の出や屋根材との取り合いを丁寧に検討し、現代的なCLT建築でありながら参道景観との連続性を意識した外観構成とした。

店舗の東西両面には大きな開口部を設けそれぞれに異なる正面性(図1)-2)、図1)-3)を与えると共に、東側の参道と西側の県道を視覚的に連続させる計画とした。参道側(東)からは県道側のケヤキ並木を、県道側(西)からは参道の石畳や街並みを望むことができ、双方向の視認性を確保している。これにより、伊勢神宮外宮、参道、店舗の関係性を空間的に結び付け周辺環境との連続性を高めている。

建物の特徴づける大屋根は、伊勢神宮の社殿建築を想起させる伸びやかな切妻形状とし、現代的な店舗建築でありながらも落ち着きと象徴性を併せ持つ意匠としている。また、深い軒を設けることで、夏季の日射遮蔽および雨掛かりの低減を図り、室内環境の安定化と外壁保護に寄与している。

外壁には焼杉加工を施し杉材本来の木目や質感を活かすことで、周辺の伝統的建築様式との視覚的調和を図った。また、耐久性の向上およびメンテナンスの負担軽減を図るとともに、木材の持つ断熱性と相まって省エネルギー性能の向上にも配慮した。さらに、焼杉特有の陰影と質感により外観に奥行きと重厚感を与え、切妻屋根との調和を図っている。

参道側の外部空間は、観光客が歩行しながら自然に立ち止まり、滞留や交流が生まれることを想定した木質空間として計画した。看板計画についても、周辺景観との調和に配慮し過度な主張を避けた配置・寸法とした。

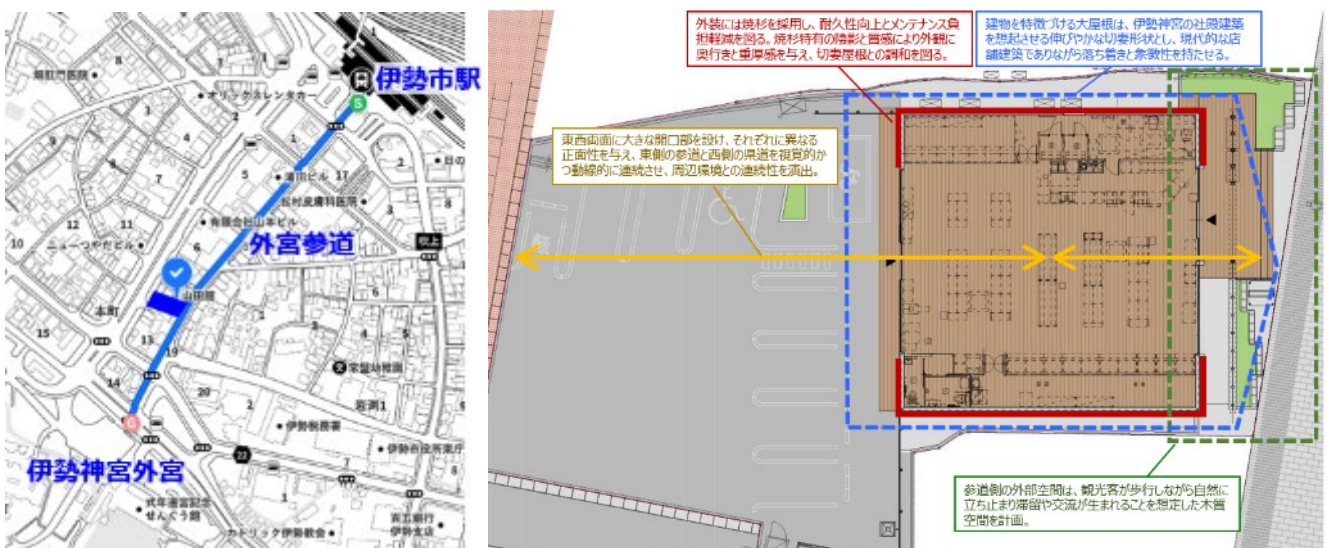


図1)-1 敷地概要



図1)-2 パース図(外宮参道側)



図1)-3 パース図(国道駐車場側)

1)-1 構造計画

構造計画においては、CLTを面材として活用することで高い構造強度を確保し、柱・梁を極力省略したシンプルな架構を実現した。また、南北のコの字型外壁および切妻屋根をCLTパネルで構成し内部は無柱の大空間とすることで店舗としての機能性と開放性を両立している。(写真1)-1)

尚、参道景観に溶け込みつつも商業施設としての視認性を確保するため、看板の位置および高さについても慎重に検討を行った。

施工面では、工場加工されたCLTパネルを現場で組み立てる工法を採用し、RC造と比較して工期の大幅な短縮を実現した。これにより、基礎への荷重負担軽減や施工管理の合理化にも寄与している。

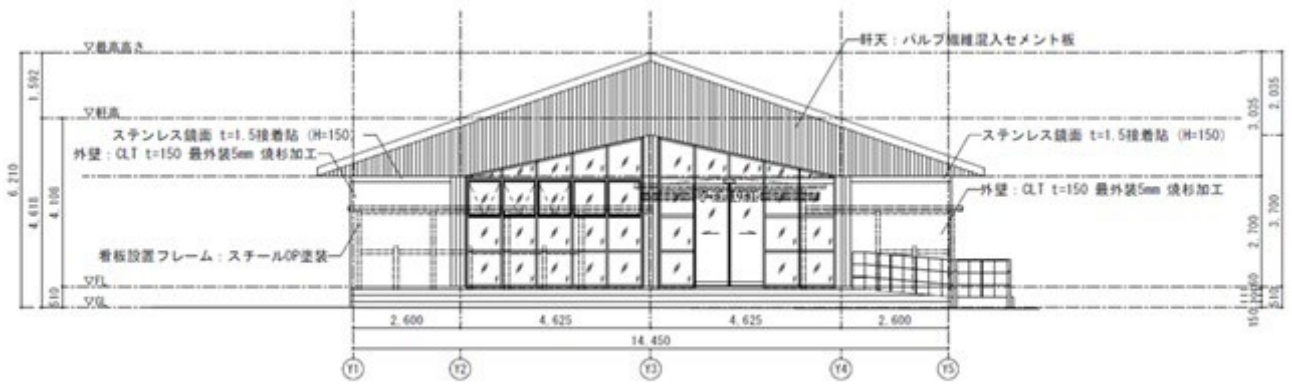
そして、構造材と外装仕上げ材を兼ねるべく、CLTパネル最外層ラミナを5mm程度焼焦がし十分な炭化層を確保する加工を施すことで、CLT現わし外壁材として50年ともいわれる対候性・耐久性を確保する試みを行った。

防耐火性能については、面全体で荷重を分散するCLTの特性を活かし、準耐火45分の燃え代設計を採用することで高い耐火性能を確保した。厚さ150mmのCLTパネルは、高性能グラスウール(16kg/m³・厚さ50mm)相当の断熱性能を有する。

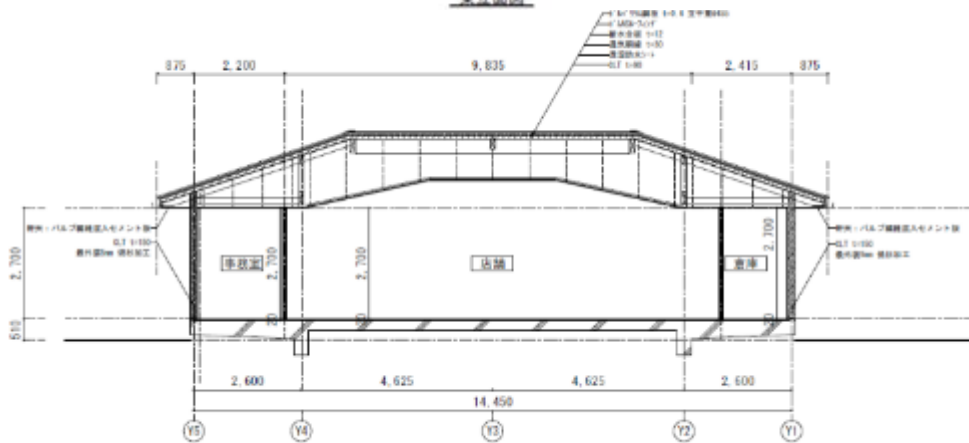
本計画は、CLTと焼杉を組み合わせることで、構造的・耐火性・耐久性・断熱性・意匠性を統合した機能複合型の木質建築を実現したものである。



写真1)-1 CLT パネルで構成した外壁と屋根

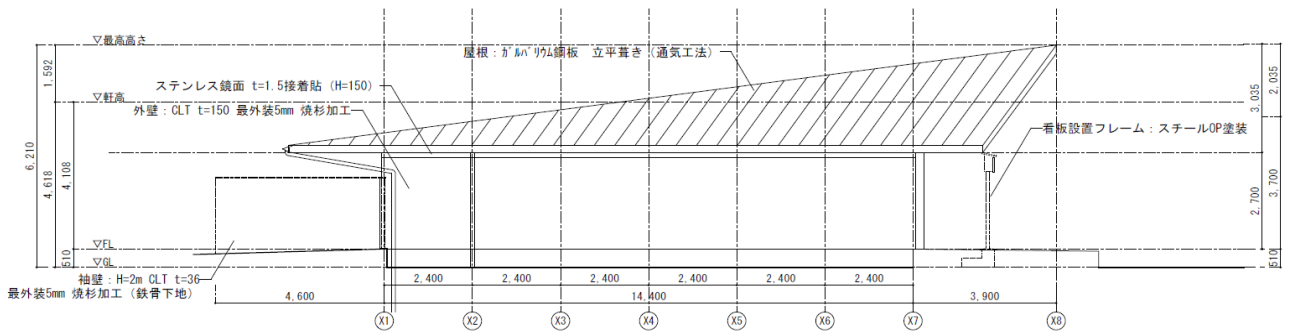


東立面図

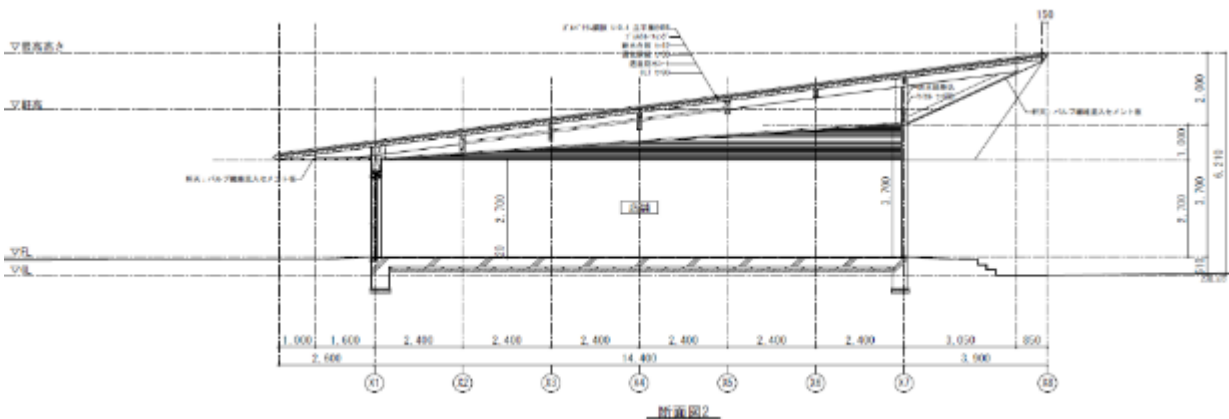


断面図1

図1)-4 外宮参道側(東側)の立面図と断面図



南立面図



断面図2

図1)-5 南立面図と断面図

<防火性能>

45mmの燃え代設計において45分の準耐火構造(告示平12建告第1358号第1第3号ホ 令和元年告示195号第1第1号ホ)であり、延焼のラインにおける防火性能を見たいしている。更に、焼杉による5mmの炭化層は延焼防止性能を向上させるものとなる。

外壁150mm厚の断面構成:構造層90mm+燃え代設計層45mm+炭化層5mm+10mm

<通気性>

外壁現しであるので通気性を考慮しなくてよい。

2) 強度と耐候性を両立させるCLT現わし技法の確立

CLTを外壁現わしとして使用する焼杉CLTに十分な耐候性・耐久性を持たせるために表面に5mm程度の炭化層を持たせることが必要と想定される。火力や焼焦がし時間等の条件や端部の処理方法、保護塗料等を各種検討し耐候性暴露試験によりCLTに確実に炭化層を構築する手法を確立する。尚、保護塗料は耐久性確保だけでなく、触った際の汚れ防止やメンテナンス頻度減によるライフサイクルコストの削減効果も狙う。

2)-1 焼杉CLT

焼杉に関する研究論文¹⁾では、炭化層の厚みと耐候性能に関する比較が行われている。論文では、耐候性能は炭化層の厚みに大きく影響し、特に炭化層を2.9～4.2mm確保した深焼では劣化率の変化がほとんど見られないという実験結果となっている。また実際に、耐候性・耐久性に実績ある市販品焼杉板の炭化層厚みは、例えば天龍焼杉で3～4mm、瀬戸の焼杉で3～5mmとされていることから、本事業では炭化層の目標厚みを5mm程度と設定した。表2)-1 は、焼焦がし深さと炭化層の厚み及び焼杉表面の比較である。

焼杉を製造する方法には、伝統的な手焼き(杉板3枚を三角柱に組み内部で火を燃やして表面を炭化させる方法)や機械焼き(高温の炉で杉板を短時間で焼き上げる方法)があるが、CLTパネルは面積が大きく、どちらの方法も対応できない。そこで、今回は農業用のプロパンバーナーを使いCLT表面を焼焦がし手法を取った。尚、焼焦がしたくない部分には石膏ボード等の不燃材でマスキングすることで焼焦がし範囲をコントロールした。



写真2)-1 CLTの焼焦がし

表2)-1 焼焦がし深さの違いによる比較




		
炭化層の厚み 約1mm	炭化層の厚み 約3mm	炭化層の厚み 約5mm

写真2)-2は、実際にCLTパネルを約5mm焼焦がしたものであるが、焼いた際にできる杉表面のうろこ模様等、実績ある市販品焼杉板 写真2)-3 と同様以上の仕上がりを実現している。



写真2)-2 5mm程度の焼焦がし



写真2)-3 (参考)市販品焼杉板(天龍杉)

本事業では、CLTを製造・加工は岡山県の銘建工業で行い、三重県伊勢市の建築現場に輸送する必要がある。工場敷地で焼焦がしをした場合、焼杉CLTパネルを現場まで輸送する必要があるが、パネルを重ねて輸送すると損傷のリスクが高い。そのため、輸送効率等を考え現場で焼焦がし&塗装工程を行う方法をとった。

写真2)-4のように建物基礎上にCLTパネルを敷き詰め、焼焦がし&塗装工程を施す。その後、そのままCLT建方を行った。



写真2)-4 焼焦がし施工風景

2)-2 保護塗料の選定

5mm程度の炭化層は、一般的に50年以上ともいわれる耐久性を有している。すなわち、耐候性に対しては炭化層自体が機能すると考えることができることから、保護塗料には炭化層の耐衝撃性や耐剥離性等の効果が求められる。そこで、塗料に求める要件を下記の通り設定した。尚、焼杉の最古メーカーとされる共栄木材でも、水性アクリル樹脂系もしくはウレタン樹脂系のクリアー塗料を塗布し表面炭化層の凝固を行っている。

<塗料に求める要件>

- ・ 炭化層に浸み込み硬化することで耐衝撃性が確保される
- ・ 炭化層に触れた際に黒くならない
- ・ 塗装効果が持続性される
- ・ メンテナンスが容易である

本事業では、玄々化学工業の協力を得て、上記要件を満たし優れた耐候性・耐久性を実現する塗料の検討を行い、以下の4種類の塗料を促進耐候性試験にて評価した。

表2)-2 選定評価した塗料の一覧

INDEX	メーカー	品名(品番)	樹脂/色	特徴
和信	和信ペイント	外部用ニススプレー (27591)	ウレタン・クリアー	塗料評価のコントロールとして選定
玄々A	玄々化学	ユートンAQUA (SC-93)	ウレタンアクリル・ クリアー	成分はウレタンアクリル樹脂で、塗膜の耐候性に優れ、外部用塗料として使用される
玄々B	玄々化学	エクステエナメル カラレス(S5-10)	アクリル・クリアー	塗膜の柔軟性が高く基材への追従性が良好 木材の動きに対する追従性が最も高い製品
玄々C	玄々化学	エクステエナメル ブラック(S5-1500)	アクリル・ 黒塗りつぶし	S5-10に黒顔料を追加。黒顔料による耐光性向上が期待できるが、チョーキングのリスクあり

<試験施設>





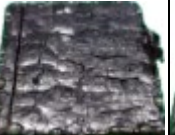












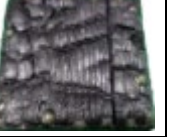

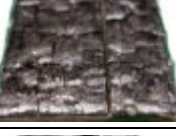
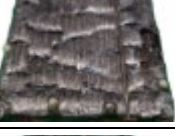









茨城県産業技術イノベーションセンター 繊維高分子研究所
〒311-3195 茨城県東茨城郡茨城町長岡3781-1

- ・ 試験名 :CLT用スギ材の促進暴露処理
- ・ 内容 :実験室光源による暴露処理(1,000時間)
JISA1415 WX-A法
(高分子系建築材料の実験室光源による暴露試験方法)
- ・ 試験片の大きさ:70mm角
- ・ 進め方:250時間ごとに経過観察



写真2)-1 耐候試験機

表2)-3 促進耐候試験の途中経過

	CLT無加工	炭化層5mm 塗装無し	炭化層5mm 塗装(和信)	炭化層5mm 塗装(玄々A)	炭化層5mm 塗装(玄々B)	炭化層5mm 塗装(玄々C)
処理前						
250時間 処理後						
460時間 処理後						
750時間 処理後						
1,000時間 処理後						

1,000時間経過後の試験片の状態は以下の通り。

- ・ 無塗装の試験体は白色化。また、(和信)(玄々A)(玄々B)の3試験体は光沢がやや低下
- ・ 炭化層を持つ試験片では、時間経過による劣化は認められない

<考察>

- ・ (和信)は、高硬度で塗膜が硬いが炭化層表面の固着が弱い印象。より浸透しより強固な固着が好ましい。
- ・ (玄々B)は、黒顔料により耐候性は向上することが予想されるが、将来チョーキングが生じる恐れがある。
- ・ (玄々A)(玄々B)の試験結果に優劣は認められない。但し塗膜の柔軟性が高いBの方が外壁塗装に適する。

<選定結果>

前提として「炭化層自体が耐候性を確保している」ことを考慮すると、保護塗料に求める要件は炭化層維持に必要となる耐衝撃性や耐剥離性の確保と、炭化層に触れた際に黒くならない塗膜の形成となる。(玄々A)(玄々B)(玄々C)の試験結果が同等であったことから、塗膜の柔軟性が高く基材への追従性が良好、且つ、チョーキングのリスクがない下記の塗料を選択することとした。

選定塗料：(玄々B)玄々化学工業 エクステエナメル(カラレス)、品番S5-10、アクリル系樹脂、クリアー

3) CLTを外壁現わしに対する地際部、及び接合部小口の吸水・腐朽リスクへの対策

焼杉CLTを構造体と外壁現わしとして使用するため、止水性の確保だけでなく、外壁地際部及び接合部小口の吸水・腐朽リスク等への対策が必須となる。課題と対応策を洗い出し、各部へ効果的且つ施工可能な施策を多層的に実装した。

<CLT形状による対策>

地際部については、外壁に付着した水分が小口にまわりにくくするため、図3)-1に表す通りCLT最外層ラミナのみを15mm長く設定し、有効に雨水が切れる形状とした。尚、意匠的に最外層ラミナで土台が隠れるようにするため、基礎上の土台には高さの低いねこ土台を採用した。

一般接合部については雇実による実加工を採用。(図3)-2) 尚、建て方時にCLT同士を擦り付けるように立てる必要(アンカーボルトとの位置関係)があることからブチルテープ等の対策が難しく、追従性が極めて高いブチルコーク等のシーリング剤を塗布することで接合部小口への雨水侵入対策とした。また、出隅の接合部については、上記に加え、小口を露出させない形状とするため、留加工による接合方法(図3)-2)を採用した。

<塗料による対策>

CLT形状だけでは防ぎきれず小口へまわった水については、木材専用塗料メーカーと密に連携・相談し、高い止水性・追従性を保持する小口専用塗料を塗布することで、小口からの水の吸い込み対策とした。

<排水性向上に関する施策>

CLT接合部は雇実によるものとし、万が一接合部にまわった水が雇実によって止められ、下部に落ちる形とした。また、下部には板金による隠し水切りを配置することで、有効に外部に排水されるよう配慮した。(図3)-2)

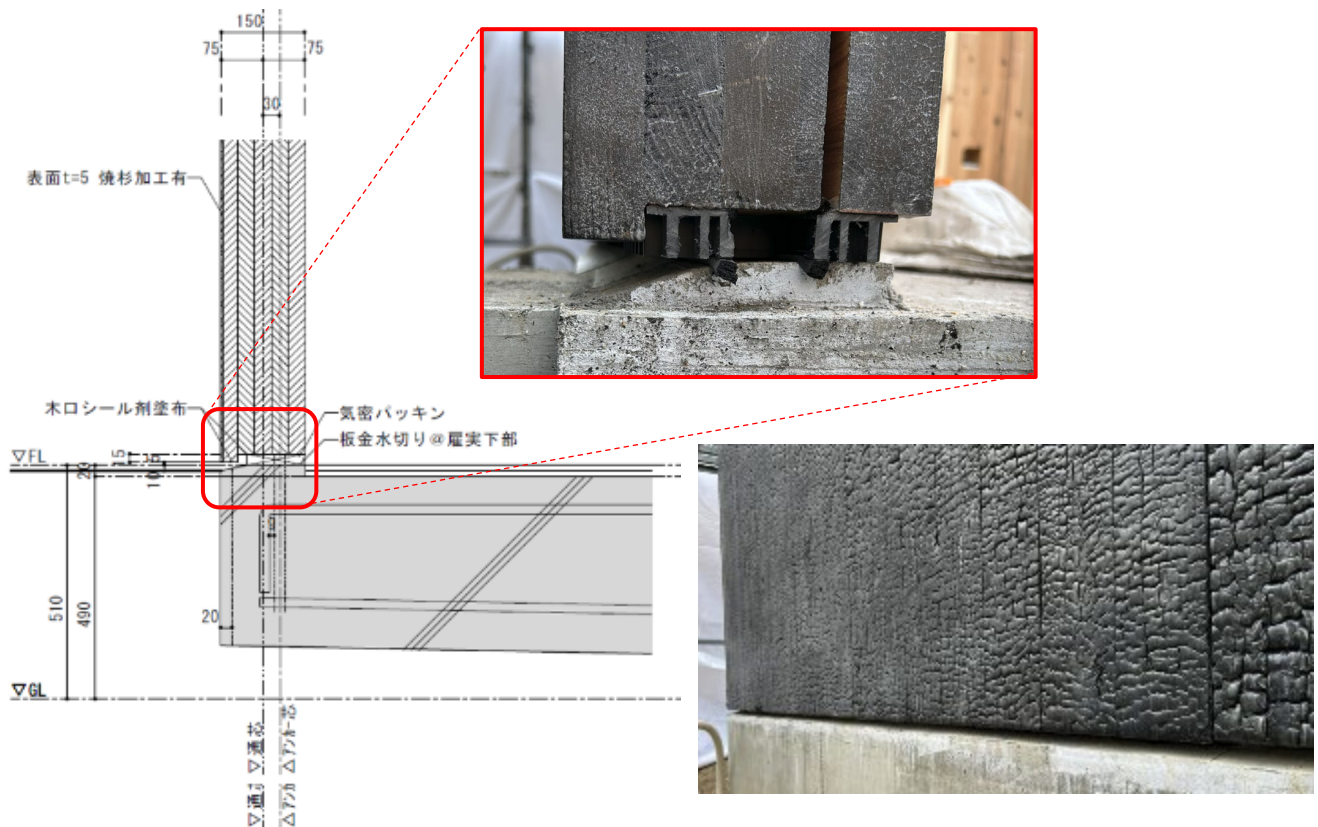


図3)-1 地際部の吸水・腐朽リスクへの対策

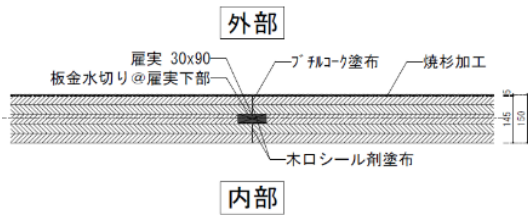
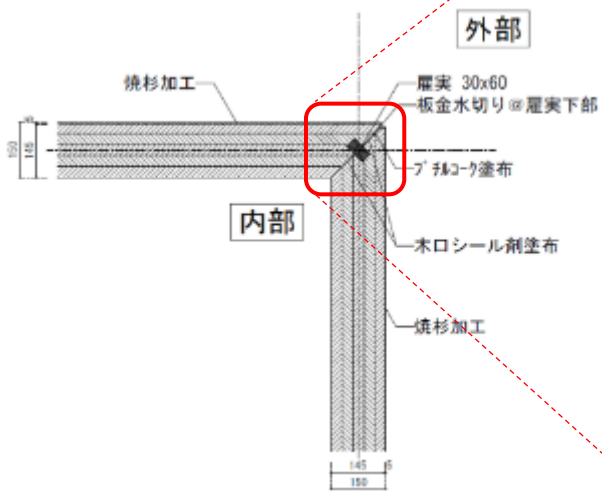


図3)-2 出隅接合部の留加工

まとめ

伊勢神宮外宮参道に面した今回の用地は、地元発展会からも地域景観との調和に対する意匠性への強い要望があり、一方、店舗を運営する側からは自由度の高い無柱空間や短工期といった要件があった。今回試みた焼杉CLTパネルにより、構造性能・意匠性・断熱性能・耐候性・施工性が一体化されることで、これら多くの要望を高次元で実現することが可能となった。これは、CLTが生み出す高い空間自由度による店舗競争力の確保と地域特有の景観やまちなみとの共生を意味し、多くの商業エリアにおいて木質構造を活かした店舗計画の参考モデルになり得るだろう。特に、これまで困難だった「屋外現し」の一手法として、そして日本発祥のCLT現わし手法として焼杉CLTパネルは十分に有効な手法であると考えられる。

